

[研究ノート] 「フラッシュ体験」とは何か?——  
P・トゥルニエの場合——

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2023-09-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 佐々木, 勝彦 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/2000006">https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/2000006</a>

## 「フラッシュ体験」とは何か？

—— P・トゥルニエの場合 ——

佐々木勝彦

はじめに

もう20年も昔の話ですが、筆者は『生きる』（2001、青鞥社）という書物のなかに、「P・トゥルニエの世界」というメモを取めました。それは、愛読しながらも、どうしてもまとめきれない彼の思想をなんとか形あるものにしようとした足跡でした。そのメモは次のように結ばれています。「最初に通読したのが1986年11月。それから7年後に「原稿」をまとめ、さらにいま7年後にそれが活字になろうとしています。何とあれから14年もかかっています。不思議な感じですが。これもなくてはならぬ時間だったのでしょう。」

この中に出てくる通読した書物とは、トゥルニエ著『強い人と弱い人』（1948、野辺地正之訳、ヨルダン社、1968）です。この時点で『生きる』の読者として想定していたのは、もちろん大学生およびその世代の若者でした。そして今、改めて彼の書物を取り上げる必要性を感じたのは、ある生涯教育のプログラムのなかで、高齢者を対象とした「聖書講話」の担当を依頼されたときです。まずその準備としてトゥルニエ著『老いの意味——美しい老年のために——』（1971、山村嘉己訳、ヨルダン社、1975）を読みました。その最後のページに書き込まれメモによると、筆者は1986年7月15日にこの書物を読了したことになります。そしてそこには、トゥルニエが自分のことを語っている頁が記されています。これは、筆者がトゥルニエの個人史に関心をもっていたことを示しています。ところが今回は、話をする相手が高齢者であり、講演者自身が後期高齢者と呼ばれる世代に属しています。したがってその読み方も、関心もおのずから異なってくるに違いありません。調べてみると、原著の発行年は1971年となっています。それは、彼が73歳のときに当たり、この書物を高齢者に紹介する際に、「同世代の人物が書いた書物」として紹介することができそうでした。

ところが筆者に与えられた課題は「聖書講話」であり、読み直して分かったことは、訳書で411頁もあるにもかかわらず、「聖書箇所索引」が見当たらないことでした。もちろ

ん本文の中には、聖書への言及があり、最終章である第6章の表題は「信仰」となっています。「復活」の問題も取り上げられています。期待したほどの頁数ではありませんが、これは各章のバランスを考えた上での構成と考えられます。したがって、これ以上の頁数を期待する方が無理というものでしょう。

では、どうすればよいのか？その時ふと思いついたのが、あの本です。たしかに持っていたはずでしたが、退職時に処理した書物のなかに紛れ込んだらしく、いくら探しても見つかりません。しかし最終的に、大学の図書館に収められていることが分かり、なんとか手にすることができました。トゥルニエ著『聖書と医学』（1951、赤星進訳、聖文舎、1970）がそれです。もちろん今は絶版となった貴重な訳書であり、聖書箇所索引を探すと、何とそれだけで11頁もあります。これだけで、その表題にふさわしい内容になっている、と想像することができました。原著の初版の発行年時は1951年となっており、そのとき著者は53歳になっていたはずです。「はずです」と言うのは、発行年しか記されておらず、その年の誕生日を迎えていたのかどうか分からないからです。彼は1898年5月12日にジュネーブで生まれ、1986年10月7日に88歳で亡くなっています。

#### あの本はどこへ行ったのか？

借り出した書物のコピーを読みながら、たしかに筆者が持っていた「あの本はどこに行ったのか？」という問いが頭を離れませんでした。それは、「惜しいことをした」という悔いの念と、探していた宝物をついに見つけたという喜びの入り混じった複雑な感情でした。

400頁もある訳書を読み通すには、かなりのエネルギーが必要ですが、100頁程読み進んだとき、この書物を最初に手にした時のイメージがよみがえってきました。それは、「残念ながら、この本は古い」という印象でした。伝統的な聖書の読み方と歴史批評学的・文献学的な読み方の緊張関係に悩まされていた筆者には、その聖書引用があまりに素朴で強引に思われたのです。トゥルニエの医療経験とその心理学的分析に興味を覚えても、その「霊的」聖書解釈には無理があるような気がしました。結局、最後まで読まずに途中で見切りをつけ、「日本語訳のための著者序文」に目を通すこともありませんでした。

あれから40年もたち、その間に、不可能と思われていた「イエス伝」や「パウロ伝」を書く聖書学者も現れ、歴史批評学的・文献学的聖書研究は、各人各様の答えが並ぶ一種のカオスのような様相を呈しています。筆者はその中で、主に若者の「宗教教育」に関わり、「イメージ・物語」の重要性を強く感じてきました。例えば、パウロの信仰ないし思想について語る場合に、たとえその歴史的資料は少なくとも、彼の回心体験の記事と、使

徒言行録に記されているような宣教旅行の記事をひとつの「イメージ・物語」にまとめて提示しないかぎり、聞き手は混乱するばかりです。イエス・キリストについて語ろうとする場合にも、共観福音書がそうしているように、与えられた情報を一つのつながりのある話にまとめることにより、ようやく相手に伝わる可能性が生まれます。彼の言葉だけを集めた語録集で満足できるのは、すでに彼についてある程度の情報を持つひとだけです。宗教教育の場面では、対象年齢が低くなればなるほど、まとまった「イメージ・物語」が必要とされます。筆者は、東北学院幼稚園の先生方の聖書研究に関わったとき、それまでの自分の学習が不十分であったことを痛感させられました。歴史批評学的・文献学的知識だけではどうにもならないからです。幼稚園児から大学生まで、イエス・キリストについて、またパウロについて理解するためには、誰もが「まとまったイメージ・物語」を必要とします。しかもこの「イメージ・物語」の展開過程は、対象者の年齢。つまり聞き手の「時間意識」の違いを配慮したものでなければなりません。

『聖書と医学』の第一印象は、その当時、主に大学生を相手に講義をしていた筆者にとって、「何ともちぐはぐな感じ」がしたのです。その聖書引用が強引に思われたからです。ところが今回、少し丁寧に読み、最後に「日本語訳のための著者序文」に触れたとき、啞然としました。そこには、70歳になったトゥルニエの「自伝」の核心ともよぶべき事柄への言及があったからです。それは、「1968年11月12日、ジュネーブにて、パウル・トゥルニエ」という文章で結ばれているので、原著の発行から17年後、そして『老いの意味——美しい老年のために』（1971）出版の約2年前に書かれたこととなります。彼はこう語っています。ゆっくり読んでみてください。これがトゥルニエなのです。

「私は、読者は著者のことを知りたいという気持ちをもっていると思う。私はスイスの一開業医であり、ジュネーブで生まれ、今もそこに住んでいる。私は今70歳であるが、私の父はこの年齢で死んだのであった。それは私が生まれて3ヶ月の時だった。私の母は、私が6歳のときに死んだ。そのようなわけで、私は、学校の友だちやすべての人を避けて、深い精神的孤独の中で私の幼年時代を過ごした。自分は、なるべくして医者になったと考えているが、その理由は、私は直観的に、私を私の孤立状態から引き出してくれるような人間的な職業を探し求めていたからである。

しかしながら、外的な環境は内的な障害を取り除くのに十分ではない。私が個人的な接触をもてるようになり、他の人々が彼ら自身を、自由に心を開いて表現するのを助けることができるようになったのは、ただ宗教的体験を通してだけであり、私の妻、私の友人たち、私の患者たちとの真剣な対話を通してだけである。このようにして私は、すべての人

がそれぞれの個人的な重荷と秘密の不安、および苦痛に満ちた記憶やすばらしい思い出をもっていることを理解するようになった。ある人は自分の考えを表現することに非常に困難を感じているが、しかしその人が、病気の時に、自分の考えや問題点について自由に話したとするならば、そのことは病気の回復を大いに助けることになるであろう」（1頁以下）。

この序文の前半に言及されている「外的環境」についてより詳しく知りたい方には、トゥルニエ著『人生を変えるもの』（山口實訳、ヨルダン社、1987）をお勧めします。ただしこれも、残念ながら今では絶版になっています。その発行所である「ヨルダン社」はもう存在しないからです。この本は、トゥルニエの了解を得て編集された、晩年の講演・随筆集であり、彼自身の生き方に大きな影響を与えた出来事や人びとが取り上げられています。特に、「追記 86歳で再婚して、1984年7月」の記述は、P・トゥルニエとは一体何者なのか？と改めて問わずにいらなくなる話になっています。そこには「私の父は32年下の母と結婚したとはいえ、それは60歳の時である。しかし、私はもう86歳だ。さらに、この再婚がもたらすであろう激動についてのあらゆる意識的、無意識的恐れにおののいた」（177頁）という告白が出てきます。この時、結婚相手となったコリンヌ・オラマは48歳でした。この記述を読むまでは、トゥルニエの母の年齢を推定する手がかりはありませんでした。しかしこれで、彼は1898年5月12日にジュネーブで生まれ、その3か月後に父が70歳で亡くなったとされているので、この父より32歳年下とされている母は、38歳であったことになります。この母が亡くなるのが、トゥルニエが6歳の時とされているので、彼女は44歳で亡くなったことになります。これらの事実は、トゥルニエの生涯を考えると、幼年時代の内面形成に大きな影響を与えたというだけでなく、晩年に、一見無謀とも思える決断をした事実の背景をイメージするうえで、重要な意味をもつのではないのでしょうか？孤児となったトゥルニエが最後に賭けた「冒険・自己表現」、それはまるで父の再婚問題を跡付けているかのような印象を与えます。こうして見ると、彼の生涯には、「母の死」への復讐とその克服だけでなく、「父の死」への復讐とその克服というモチーフも隠れていることは確かです。そしてこの克服の根底にあったのが「フラッシュ体験」ではないかと考えています。

いずれにせよ、筆者が衝撃を受けたのは、この『聖書と医学』の序文の中に明確に「宗教的体験」への言及があることでした。筆者が長いあいだ求めていたのは、この「宗教的体験」についてのより詳細な情報と、トゥルニエ自身による解説でした。

## 「母なるもの」と「父なるもの」

ここでまず、前項で紹介したトゥルニエの自己紹介の言葉をもう一度跡付けてみましょう。場所はスイスのジュネーブ。気づいたときには、牧師であると同時に詩人であった父は亡くなっていました。そして母も6歳のときに亡くなっています。トゥルニエは姉と共に叔父夫婦に引き取られ、そこで育ちます。そこでの経験を彼はこう回想しています。「生活は何不自由ななかった。叔父夫婦も惜しみなく世話と愛情を注いでくれた。もし何かが悪れたとすれば、それは私の内部においてであった。私は傷ついた心を防衛するために鉄のカーテンを下ろし、抜けがたい精神的孤独に埋没した。警戒心が強く、自分に引きこもり、友達と付き合うこともできなかった」(『人生を変えるもの』164頁)。そして母親との関係については、「私の人生に最も大きな影響を及ぼした出来事は母の死だと思う」(161)と述べています。彼の記憶に残されているのは、溺愛してくれたはずの母の思い出ではなく、母の病床に近づいた場面だけでした。彼はこの事態を、「母の死のショックが記憶を無意識の中に押し殺してしまったのは明らかである」と説明しています。さらに彼は、彼が25歳のときに結婚した妻ネリの死(1975年)との関連で、「子供の時に刻印された死との対決が私の一生を方向づけたようである」(166)と述べ、12、3歳の頃に二つの決心をしたことを紹介しています。そのひとつは、ひとり小声で「イエス様、私の一生をあなたにお捧げいたします」と言ったこと。そしてもうひとつは、数学者になったところで、世の中の苦しみをなくすにはたいして役に立たない。何かもっと人のためになる道を選びたい。そうだ、医者になろう」と決心したことです。

トゥルニエの人生に意味を与えたのはこれら二つの決心であり、そこから徐々に「人格医学」ないし「全方位医学」へと向かう情熱も生じて行きました。ただしこの情熱が現実化するためには、知的活動を通して「己に閉じこもる非社会的孤児コンプレックス」から解放され、さらに「自分の気持ちを伝える」という感情・情緒面での解放が必要でした。この間の事情をトゥルニエはこう説明しています。「知的、客観的、科学的な面は、言うなれば人間の男性的側面であり、情緒的な面は女性的側面である。私は父の死からは解放されていたが、母の死からは解放されていなかったわけである。このことはずっと後になって分かった。教会でも私は観念の論議にあけくれていた。信仰の教義、原則、概念などについて議論を戦わし、正統派と改革派の論争を繰り返していた。しかし、教会での活発な活動とは裏腹に、自分の内面の貧困さに気がついていた。いくら心を改める決意をしても効果がなかった。神の中に心をひそめる黙想という祈り方はまだ知らなかったからである」(169頁以下)。

この「黙想」を具体的に探究する過程で、トゥルニエが内科医から「広い意味での」精神分析医に生涯を捧げるべきことを自覚したのは、「1937年のある日」のことであり、彼はそれを神による召命として受けとめました。85歳になったトゥルニエは、自らの生涯を振り返り、「私を理解するには、母の死ということが糸口になるように思う。母の死はわたしにとって大きな不幸であった。……幸、不幸を問わず人生の出来事は、われわれにはほとんどどうすることもできない。だからわれわれが責任を持つとすれば、それは、それらの出来事に対する対処の仕方においてである。……しかし、われわれ一人だけの責任ではないことも事実だ。他人の助けによるところもあるからである」（174）と語っています。そしてこの話を次のように結んでいます。「われわれの不幸や幸せの折、失敗や成功の折に、タイミングよく真の出会いをするように神があるひとを動かすのではないだろうか。実際、人生の夕暮れに至って一生を振り返るとき、神よりいただいたもの以外に一体何が残るであろう」と。

なお、ここでわざわざ「広い意味での」精神分析医という表現を選んだのは筆者です。それは、この精神分析という用語から、フロイトの立場に立つ者という誤解を避けるためです。トゥルニエは、臨床の現場では、フロイトの心理分析も、ユングの分析も、アドラーのコンプレックス論も自由に用いるという姿勢を貫き、さらに臨床の場を「出会いの出来事」が生ずる機会として捉えています。例えば、「医学的診断は客観的なものですが、意味の領域はそういうものではなく、患者だけが見つけることができるものです」と述べ、診療に関わる自分についてこう語っています。「私はいつも自分に言い聞かせます。「この患者は神が私に送ってくださった人だ。問題を抱えているが、解決できるのは神であって私ではない」と。私としてはこの人を受け容れ、心の出会いができる用意がなければならぬ。そのためには、科学の舞台からおりなければなりません」（48）。

なお、トゥルニエは、先の引用文に記されているように、本当に父の死から完全に解放されていたのか？という問題については、後段でもう一度取り上げる予定です。もちろん、それほど簡単なことではなかったはずだからです。

## フラッシュ体験

「フラッシュ (flash)」とは、「(光などの) ひらめき」「(感興・機知などの) ひらめき」を指す英語ですが、精神分析学者のマイケル・バリントはこれを「医師と患者の真実の出会いの瞬間」を指す用語として用いました。トゥルニエは「私なら「コミュニオン」(心の触れ合い) (『人生を変えるもの』46頁) と呼びたいところだと言いつつ、その「造語」



を称賛しています。トゥルニエによると、「分析者と患者の両方とも宗教を奉じていなくても、フラッシュにはすでに神的現実が宿っています」(47)。バリント博士ならこれを心理的経験と呼ぶところですが、トゥルニエによると、それは魂の体験であり、「神が語りかける瞬間」であり、「人間がその捉われから解放される瞬間」です。医師の場合であれば、それは自分自身から、つまり「科学の牢獄」(48) から解放される瞬間です。

宗教および神学の視点からみると、これは明らかに「超越者との出会い」の経験であり、回心体験に相当する出来事です。『聖書と医学』の最終章である28「最高善」には、この回心体験に言及していると思われる箇所が出てきます。少し長いですが、そのまま引用しておきます。文頭についている番号は、後で議論するときのために筆者が付したものです。

このフラッシュ体験から見るとき、私たちの探究しようとしている「P・トゥルニエの聖書理解の特色」が、ひとつのまとまりのあるものとして見えてくるはずです。では、早速、読んでみましょう。

・① 私はよく、私がすでにキリスト者となっていたある時のことを思い出す。私はイエス・キリストを信じ、彼を愛していた。私はキリストの教会で積極的な役割を果たし、聖餐式を通してキリストと交わっていた。しかし、私の献身的な生活の中心を占めていたのは、神であって、イエス・キリストではなかった。キリストは同じ神である。しかし私たちは、イエスの中に神が最も親密に、最も身近に「人間の姿になられている」(ピリピ2・7) のを見る。イエス・キリストとの間には、父なる神だけとの関係よりもさらにもっと親しみ深い関係が確立されうる。このことについて、私が生き生きとした実感が与えられる日が来た。私は、教会の事務的仕事の手伝いに、年とった牧師のところによく行っていたのであったが、その老牧師はいつも最後に私と一緒に祈らなければ、私を帰らせてくれなかった。老牧師は自分の祈りをいつもイエスに向けて話しかけていたが、ある日私は、彼の子供のような何の飾り気もない純真さに心を打たれたのであった。それはあたかも彼がいつもイエスとの間でかわしている親しみ深い会話を声に出し続けているかのようであった。

・② 家に帰ってから私は、妻にそのことをよく話して、その老牧師が持っているイエスとの親密な交わりを私たちにもお与えくださいと、妻と一緒に神にお願いした。それ以来、イエスが私の献身の中心となり、私の人生の同伴者となっている。イエスは、わたしのすることを喜んでくださり(コヘレト9・7)、御自身もそのことに関心を持ってくださる。イエスは、私の生活に起こるあらゆることを一緒に話し合うことのできる友である。イエスは、私の喜びと苦しみ、私の希望と恐怖を分かち合ってください。患者が私に心を打ち



明けて話している時、イエスは私と一緒に患者の話を聞いてくださり、私よりもはるかに良く聞いてくださっている。そしてその患者が帰った後、私は患者の話したことについてイエスと語り合うことができる。

・③ 私がここに書いていることは決して魔術的なユートピアではない。私は、そこにもなお残存している暗黒面を十分に良く知っている。すなわち、このイエスとの絶えざる会合の中にも入り込んでくる私自身の不誠実さを。それは私たち人間の自然性である。イエス・キリストは私たちの人間性を私たちから取り去り給わない。イエス・キリストは私たちの人間性の中に降りて来てくださる。それによって私は、私の困っている問題や誤りや失敗を、イエス・キリストのもとに持って行くことができる。またそれによって、私がイエス・キリストとの交わりを持ち続けるのを助けてくださる。

・④ それはキリスト者の生活のゆるぎなき岩である（詩編 62・2）。私たちは弱いままであり、不確かで変わりやすいままである。いつも問題にぶつかって困っており、そして、キリストによって私たちに委ねられている人類への奉仕という偉大な仕事の中で失望し続けている。時々私たちは間違った仕方での仕事に着手して、それを台無しにする。時には私たちの進むべき道がはっきり分かったと考えて、心を込めて、その生半可に見える仕事に突進するが、結局は思わぬ故障にぶつかって、失望するだけである。私たちを失望させ、傷つけるものは、時として私たちの友人であり、兄弟であり、時としては私たちの教会でさえある。しかしイエス・キリストは変わりなく留まっていてくださる。イエス・キリストは、そこでも私たちのかたわらに立って、いつでも私たちを受け入れ、赦し、私たちが再び自分の足で立てるように用意してくださっている。私たちがイエス・キリストとの交わりにもう一度入るやいなや、命が私たちの中に湧き上がってくる」（405頁以下）。

その「フラッシュ体験」はいつ起こったのか？

前項に引用した文章は、トゥルニエのフラッシュ体験そのものの記述というよりも、それを後から振り返り、解釈した言葉です。フラッシュ体験そのものは、パウロがそうであったように、幻として描くことはできても、客観的に表現することは不可能であり、秘儀として、神秘として、受け入れざるをえない出来事です。それは光を浴びる体験であり、その瞬間目を閉じ、後になって「声として聞こえてくる」経験です。それは、光そのものを直接見ることができないという意味で、人間の経験を越えており、また決定的瞬間という意味で、「常に新たに」声として聴かれうる出来事です。トゥルニエによると、このフラッシュ体験は、人生の中でそうたびたび起こるものではなく、あるとしても数回であろうと

されています。その意味に気づく時期は、ひとによってかなり差があり、多くの場合、かなり時間が経過してからのようです。しかもその出来事が必ず意識に昇ってくるとはかぎらず、無意識の領域にとどまってしまうこともあります。

さらに、誰もがパウロのような劇的なフラッシュ体験をもつとはかぎらず、むしろ多くの人はそれなしに生きています。この事実をどう理解すればよいのでしょうか？筆者の場合、それは「宗教教育の可能性を問う」という仕方で常に問わざるをえない問題でした。目の前にいる学生はほとんどが非キリスト者です。そこでフラッシュ体験について語るができるためには、かなりの工夫が求められます。その報われない努力に疲れてしまい、直接伝道に転身するケースも少なくありません。

教会でのカテキズム教育においても同質の問題が起こります。知的理解によってフラッシュ体験に至ることはほとんど不可能だからです。フラッシュ体験は、この知的理解が破綻する瞬間であり、カテキズム教育が新たな視点から問い直される経験でもあります。トゥルニエもジュネーブ教会で、父の後を継いだ牧師から教理問答を学び、堅信礼を受け、教理的訓練を重ねたと考えられますが、彼がフラッシュ体験を経験したのは35歳近くになってからです。彼がイエス・キリストとの人格的出会いに至るまでには、相当の年数が経過しています。残念ながら、トゥルニエのそのフラッシュ体験の正確な日時を特定することはできません。しかしおそらくそれは、彼がオックスフォード運動に関わるようになってからのことであろうと推測されます。

この運動は、1921年頃からオックスフォードの学生を中心に展開された運動で、アメリカのフランク・ブックマン(1878-1961)によって提唱された思想を背景としています。彼は「正直、無私、純潔、愛」と「神による導き」を説きました。トゥルニエは「人格医学」へと転身するきっかけについてこう述べています。「1937年、私はさらにもう一つ転換を経験することになった。オックスフォードで開かれた大会の時だった。ブックマンは、神に仕える決心は、職場においても具体的に表されなければならないと話された。私はそれに心をうたれ、自分としては霊的・倫理的生活が健康に及ぼす影響を特に重視した医療に献身する決心をした。でもどうしたらよいのか分からない。それで、まず手始めに何人かの医師仲間に相談してみた」(『人生を変えるもの』32頁)と。この文章はすでに「一つの経験」があったことを示唆しています。それは、1932年11月23日に「教会の憂志」グループの主催で開催された講演会とその後に起こった出来事です。つまりその講演会で聞いた、国連の高官であったオランダ人のヤン・フォン・ボルデ氏による「黙想」についての話と、その後での彼との個人的な対話のなかで経験した解放体験です。その対話のなかで、彼は「34歳になって初めて、他人の前で涙を流して、小さいときから心の奥に秘

めてきた孤児としてのつらい悲しみを打ち明けた」(30頁)のです。

いずれにせよ1940年には『人格医学』の最初の原稿ができあがり、それを軍隊生活のなかで推敲したという記述が残されており、前項において紹介したトゥルニエの「フラッシュ体験」は、1932年以後のことと推測されます。なお、第二次世界大戦が終わると、彼は、政治的志向を強めるようになったオックスフォード運動に違和感を覚え、やがてその運動から身を引いて行きます。この時の「重大で危険な冒険」については、トゥルニエ著『生の冒険』(1963, 久米あつみ訳, ヨルダン社, 1971) 6「仕事の意味」の冒頭において、政治よりも「医学へと関心を向けた」「召命」(65頁)の違いとして説明されています。二つの異なる冒険を同時に生きるわけには行かず、ひとつを選択すること、それがすべての冒険の条件であるというわけです。

### フラッシュ体験とその影

この1932年の出来事について、トゥルニエ著『暴力と人間』(1977, 山口實訳, ヨルダン社, 1980)は、次のような興味深い記述を残しています。

「神は私に決断を迫ったが、私は神のこの挑戦状を前にしてなお数週間ためらった。妻や友人と熱心に話し合い、とくに私より決断力のある同僚のひとりに相談した。そういうある日の朝、私は風呂に入っていたが、妻が戸の向こうから私に尋ねた。「結局あなたはオックスフォード・グループにお入りになるのでしょうか？」私はちょっとためらったが、すぐにきっぱりと「そうだ」と答えた。「では私は？」「いやお前はだめだ。」

私が風呂から上がってみると、妻はさめざめと泣いていた。このとき私はいかに、不用意に、しかも不遜に発した言葉によって、夫婦の心が離れ離れになる危険をおかしていたのであった。妻はそれを敏感に感じて悲しんでいたのである。まだ私自身この運動に飛び込む決意ができていたわけでもなく、内部の葛藤に勝つ自信もなかった時なのに、妻に対しては彼女のことなどろくに考えず、自分ひとりで道を進むような印象を与え、彼女を一人残して離れるような不安を与えてしまったわけである。……このオックスフォード運動に、私は15年間文字通り没入し、そして戦った。……もちろん私は、こうした時期をすごしたことについて後悔しているわけではない。むしろ逆に、私にとって、この運動はキリスト教的生活のこよなき学び舎であった。心を根底から洗い直されるようなすばらしい神との出会いを経験したのもこの時期だったし、また、人びとの友情に満ちた出会いをしたのもこの時期だったからである。そしてそのおかげで私は、神との出会い、人との出会いの中にこそ、人間を一個の人格に、しかもかぎりなく尊敬すべき人格に築き上

げるものがあるということを悟ることができたのである。これは私にとって本当にすばらしい新鮮な体験であった。そしてこれが、後に私の生涯の仕事となった精神治療への門出ともなった」(249頁以下)。

この記述は、第二部「権力の持ち方」の「世界を動かす孤児たち」という章のなかの一節です。しかもそれは、最高善の発見に伴う無力感と高揚感の混在する人間の実存状況、つまり召命のような霊的召命体験の危険性について語っている章のなかで、その一例としてあげられています。それは、宣教的情熱が力への意欲と混在している実態に警鐘を鳴らしている箇所であり、トゥルニエは、自らの召命体験にもこの危険性が含まれていたことを告白しています。

またこの章では、この「力への欲求」という問題に取り組むまでは、トゥルニエの父の死が彼に及ぼしていた影響に気づかなかったことも告白しています。彼はこう語っています。

「しかし、私は、父の死が私に及ぼしていた影響については考えてもいなかった。それを私に初めて指摘してくれたのがこのランシュニックであった。父親というものは子供にとっては力のシンボルである。子供はまず父親の力にすがって生き、そして少年時代には、そこに男らしさを見習って生きるものである。父親の不在はまず、不安を意味し、次に自我をぶつける相手の欠如を意味すると共に、力を求める必要を痛感させる。私の場合、それで力への欲求が普通以上に内向したのだと思っている。こうしてみると、私が医師という権威ある職業を選んだのもあながち偶然ではなかった。そして、それが一見おとなしい無害な様相のもとに私を引きつけたわけである。先に述べたように、人を助けるということは、一見、力への欲求と逆のもののように見えるが、実はそれによって力をカムフラージュすることもできるのである。私にとって自分の権力欲を医者という職業の中で、次に物書きという職業の中で、ある程度満足させることができたことは、ひとつの恵みであり、自分でも本当に幸せだったと思っている。実際、この危険な権力欲というものは、たしかにコントロールすべきものではあるが、同時にそれは私たちを救ってくれる面も持っているのである。これが、ランシュニックによれば多くの為政者を救ったものでもあった。彼らもまた、意識的には祖国に身を捧げ、祖国に奉仕する以外に何ら目的をもたぬかの如くふるまったわけだが、実際には彼ら自身、彼らが小さい時に苦しめられた、「だれからも必要とされず、生きる価値のない」ような気持から、こうして救われていたわけである」(239頁以下)。

この言葉にふれたとき、トゥルニエの世界がようやく見えてきたような気がしました。光と影の関係が垣間見えたからです。母の死が彼の人生に決定的な影響を与えたことは、

彼自身が語っており、母が死んだときの気持ちを聞かれ、「特に人間として全く価値のないような気がした」と述べています。しかし父の死についてはほとんど語っておらず、強い違和感を覚えていたのですが、このトゥルニエの徹底した自己分析は、筆者の「もやもや感」を一気に吹き飛ばし、『暴力と人間』という書物の執筆動機も少し分かったような気がしました。

この話は、さらにトゥルニエの「宗教家としての使命」に目覚める話へと続き、私たちの問題としている「フラッシュ体験」の持つもう一つの側面、つまりその影の存在をえぐり出しています。彼はこう言います。

「私は、自分自身がなぜ医者を選んだのか、その動機を幾つか見つけてはいたが、ランシュニックはさらにもう一つの動機を指摘してくれたわけである。そしてその動機がまた、私の宗教家としての道に入る強い動機ともなっていたことがわかった。もしも医師の職業が権力への召命であるならば、まして司祭職は、それが聖職者のものと信徒のものとを問わず、さらにはるかに大きな権力への召命となるのではなからうか。考えてもみられたい。神的使命を賦与され、人びとの健康のみならず魂の救いのために働き、神の教えを伝える者となることが、いかに大きな力を意味するかを。ランシュニック自身も、「政治と宗教は、これらの非常に大きなフラストレーションを持った人たちにとっては、その代償が得られる世の中をつくるために、最も格好な手段として映るのである」と書いている」(243)。

したがって、私たちは「心の中に、そして特に、意図するところが純正な人の場合ほど、乱用へと傾く破壊的な力の欲望が忍び込み、まじめな反省によってもなか見つけ出すことができないという事実」(235)を忘れてはなりません。

### 「生きる意味」

これは、「トゥルニエ来日講演集」の表題であると共に、1977年5月21日に東京の銀座教会で行われた講演のタイトルです。このときトゥルニエは79歳になっており、彼の死の約10年前の話です。この時点で彼は、彼の生涯において彼自身の「成熟段階」に影響を与えた出来事と人物として次の三つ上げています。その第一段階は、孤児であった自分が「考えを交換し合うことにより、人と交わることができるようになったこと」、第二段階は「感情や心を通じ合うことによって、人とさらに深いレベルで交わることができるようになったこと」、そして第三段階は「精神的、霊的な深みで人とひとつになることができたこと」です。それらは、第一に「人と考えを交換し、コンタクトをとることができ

るようになること」、第二に「心情を分け合って、交わることができるようになること」、そして第三に「精神的、霊的な深みの中でなかで人とひとつになること」とも言われています。

その具体的な出来事として、16歳ときにギリシャ語の先生と出会い、自分の殻から抜け出す道を見つけたこと、34歳のときにオックスフォード運動に属していたオランダ人経済学者とヤン・フォン・ボルデスとの対話のなかで、孤児であった心の苦しみを打ち明け、自らの内なるあふれる感情を恐れずに表現できたこと、そして42歳のときに、あのギリシャ語の先生が、晩年に、トゥルニエの前で心を開き、信仰を告白したことが上げられています。最初の出会いをトゥルニエは「サイコセラピスト」との出会いとして捉え、第二の出会いも同じく「サイコセラピスト」との出会いとして説明しています。もちろん彼らその専門家であったというわけではなく、その役割を果たしてくれたという意味です。この経験がトゥルニエの「内科医」としての在り方に問いをなげかけ、やがて第三段階を経て「人格医学」の実践へと導かれて行くのです。

そこで上げられている第三段階の実例は、観念論者で、「自分は祈ることができない」と言っていたあのギリシャ語の先生が、その死の約2カ月前に、トゥルニエが、『人格医学』の原稿を先生の前で朗読したときに、「祈りましょう」と言い、彼に自分の葬儀を依頼した感動的な場面です。彼はこの時のことについて「これが、後にも先にも私が司式した唯一の葬儀になりました。これが私にとって、どんな大きな意味をもつ出来事であったか、お分かりいただけると幸いです」と述べています。それは、祈りの出来事、つまり「心と心の語り合い」が現実起きた瞬間でした。

トゥルニエの経験したこれらの三つの段階は、孤独という閉鎖状況から、つまり無意識のうちに自らの感情表現の表出を恐れていた状況から、まず知的に、次に感情的に、そして最後に霊的に解放されるプロセスとみることができます。しかし筆者は、このプロセスを、誰にでも当てはまる原則のようにとらえるべきではないと考えています。後から振り返って見ると、それはたしかに発達段階のように見えますが、すでに最初からあった可能性に気づくプロセスでもあり、その気づきはひとによって多様であり、突然、第三段階から、あるいは第二段階から、その全体像がみえてくるケースもあるのではないのでしょうか？したがってその発見段階は、そのひとのもつ性向により、環境により、出会いにより、人さまざまであり、単純に決めつけるべきではありません。トゥルニエが「黙想」にこだわった理由のひとつは、この危険性をよく知っていたからであり、しかしそれにもかかわらず、必ず導かれるとの信頼感に生きていたためと考えられます。

「生きる意味」という講演の後半部は、「老年」の問題を取り上げています。トゥルニエ



著『老いの意味—— 美しい老年のために ——』については、別の機会に、例えば堤純子著『アーミッシュの老いと終焉』（未知谷，2021）等と対比しつつ論じてみたいと思いますが、この講演において「老い」に関する彼の基本的理解が示されているので、紹介しておきましょう。彼によると、「人間は最後まで創造する人間として忙しく生きたいという内的欲求をもっている存在です。…… たとえ体力は衰え、心理的な力、記憶力などが衰えても、なお成長を続けることのできる領域があるのです。すなわち、霊的に向上することができます。心をもっと大きくすることもできます。愛に成長することもできます。若いときには、愛は極めてエゴイスティックな愛です。相手の人に、あなたをできるだけ幸せにしてあげたいと言っても、本当は自分が幸せになりたいと願っているものなのです。若いうちはそれでもよいのですが、年をとるにつれて、もっと利己心から解放された愛に成長していかなければなりません。…… また同時に、自分の内的生活のため、神との親しい交わりに生きるために、もっと時間を見つけることができるでしょう。…… しかし、老年にとって一番大きな問題は、死が近づいているということです。…… 人間は死に際してやはり非常に孤独です」（22 頁以下）。

このようにトゥルニエは、老年における霊的成長の可能性について語り、最後に誰もが直面する「死の恐れと不安」をありのままに表現する機会、つまりその「心の苦しみを打ち明ける」機会が必要であることを説いています。そして3年前に、すなわち1974年に、旅先（アテネ）で亡くなった妻との最後の会話を紹介しています。

この講演には「私の生きてきた道から」というサブタイトルがついており、彼について語ろうとする者は、まず最初にこの講演に耳を傾けるべきでしょう。前半部で特に印象に残ったのは、次の二つの言葉です。「医者には二つの使命があることが分かってきたのです。一つは学問的、科学的責任で、病人の病気を直接治療すること、もうひとつは人間的な責任で、患者の人格に巣くっている問題の解決に手をさしのべることです。」さらにもう一つ印象に残ったのは、「病気とその人の生き方との間には、何か深い関係があることに気づきました。病は多くの場合、突然生じてくるものではありません。しばしば病気には、その人の人生上の問題が象徴的に表れてくるものです。そういう病気にかぎって、医師がいくら努力してもなおらないものです」という言葉です。最初の言葉は、トゥルニエが自らの職業をどのように理解しているのかを明示しています。しかもその第二の使命、つまり人格に巣くう問題の解決に手をさしのべるということは、人格と病気の深い関係を示唆しています。この人格という言葉が、人間の肉体的、心的、そして霊的領域全体を指すとすれば、その問題の解決には、必然的に霊的領域からの答えが必要になります。トゥルニエの場合、この答えを「聴く」ためにどうしても必要なものが「黙想」でした。この「黙



想」の内容および具体的方法について考えるためには、例えば、トゥルニ著『生の冒険』（1963、久米あつみ訳、ヨルダン社、1971）第19章「瞑想」等の記述が参考になります。彼は、ブックマンがそうしていたように、「書く」という方法によって、その内容を確認していたようです。彼はいつも「黙想の手帳をポケットにしのばせていました」（『人生を変えるもの』41頁以下）。

## 「成長」と「深化」

これから先の議論は少し直観的ですので、分かりにくいと感じられる方は、無理をせずに、そのまま読み飛ばして、次の項目に進んでください。筆者の中に湧いてきたイメージをそのまま表現しようとしたため、必ずしも親切な説明になっていません。

いずれにせよこの講演を読みつつ違和感を覚えたのは、「成長する」という語が繰り返し用いられていることでした。この用語法は日本語の問題であって、トゥルニエの問題ではないのかもしれませんが、「若者」ならいざ知らず、「老年」に達した者にはあまりしっくりこないのではないのでしょうか。むしろ「理解が深まる」と言う意味で、「深まる」という語を用いる方が良いのではないかと思います。ただし、「成長する」と「深まる」ではその語感の指差す方向が異なり、前者は上方ないし前方へ、そして後者は下方へと向かうイメーを呼び起こします。

一般の日本人にとって、身体が「土に帰る」ことは自然なことであり、その霊は死体から離れ、近くに漂うか、「山」や「海の彼方」、さらには仏教的に「西方」へ向かい、そこからこの世を「見守って」います。「地獄」の思想がなければ、その死は、「老衰」で亡くなるかぎり、恐るべきものではありません。本当に恐ろしいのは、病気で苦しみ、そしてひとりで死ぬことです。だからこそ、「無病息災」「家内安全」「商売繁盛」こそが「生きる目標」であるということになるのでしょうか。

これは、思想的には、世界と超越の連続性を前提とするヘレニズムの発想に属する考え方であり、生き方です。トゥルニエは、これとヘブライズムの違いを明確に意識させるために、「成長する」という語を用いているのかもしれませんが。しかしそれにもかかわらず、筆者が「深まる」という語にこだわるのは、分析心理学の説く「自己」は、上方ではなく下方にあり、しかもそれは明らかに超越的エネルギーを前提としているからです。大気が地球を包むように、全存在が霊に包まれているとすれば、そしてその全体が、完全性や全体性を象徴する円や球でイメージされるとすれば、方向としては、「上へ」昇っても、「下へ」下っても、大気である霊に出会うことになります。アウグスティヌスが見抜いたよう

に、時間が神の被造物であるとすれば、時間は神に包まれていることになります。したがって時間は霊に包まれており、わたしたち一人ひとりの時間すなわち人生もまた霊に包まれており、わたしたちの一瞬一瞬は、そのなかでの誕生であり、そのなかでの死であることとなります。しかもそこには、霊の浸透現象が起こっているはずです。

被造物とそれを包む霊とのこの関係からみると、時間の誕生は「無からの創造」と呼ぶほかになく、被造物の死は「時間の死」と表現するほかありません。人間は被造物であって、神になることはできません。したがって完全な霊になることもできません。この意味では、死は「無への帰還」と呼ぶこともできます。ヘブライズムを前提とするならば、「無からの創造」の「無」は、被造物としての時間の存在価値およびその究極的根拠が三位一体の神にのみあることを内包しています。そしてこの主客の関係を前提として、主体である神の在り方を「永遠」と呼ぶならば、「創造」は「永遠」をその存在根拠としており、「万物の終り」あるいは「死」も、やはり「永遠」においてのみ可能になります。この意味で、特に人間存在は、その誕生と死において、この永遠との出会いがリアルに起こる存在です。教会がイエス・キリストを「真の神であり、同時に真の人間」と告白したとき、この「永遠」と「時間」の関係を表現したのであり、「時間」の言葉は、どれほど「切れる」としても、「永遠」を分析し尽くすことはできません。それをできるのは「永遠」自身であり、「時間」に可能なのは、その「永遠」が現れる「神秘」の前に、「黙想」の姿、つまり沈黙の姿勢をとることだけです。トゥルニエのフラッシュ体験は、この事態を彼なりの仕方を経験したのではないかと思います。

したがってイエス・キリストの「復活」、さらに「霊の体」という言葉も、そもそも有限な人間の理解を越えた内実を示唆しています。「イエス・キリストを信ずる」ことは、「人間・神」を信ずるということであり、トゥルニエが「黙想」の中で対話している相手は、明らかに「復活した」イエス・キリストです。彼のみが、かつて地上を歩き、生き、そして十字架にかけられて殺された人間であると同時に、いま復活して生きておられる神だからです。

### パウロのキリスト神秘主義？

『生きる意味』に収められた第二の講演記録の表題は「キリストに満ちあふれた日々」となっており、ガラテヤ書2・20の「生きているのは、もはや、わたしではない。キリストが、わたしのうちに生きておられるのである」という聖句を取り上げています。この箇所は「キリスト神秘主義」を明示する箇所として知られていますが、ここで言う「神秘主

義」とは、自他の区別の無い状態を指します。この聖句において、もしもキリストとパウロの区別の無い状態が示唆されているとすれば、キリストとパウロは同一であることになり、聖書の基本的前提である創造信仰は放棄されていることになります。では、トゥルニエは、この聖句をどのように理解しているのでしょうか？

彼は、まず、友人でもあるフィレンツェの学者ロベルト・アサジョリの「心理総合理論」を高く評価し、それに基づいてこの聖句を解釈しようとしています。トゥルニエによると、心理分析は、人間の心の動きをその要素に分解して行くのに対し、心理総合は、そのバラバラに分解された要素を、ひとつの調和した統一体に統合することを狙っています。すなわちそれは、人格を形成・統合する手段に関する理論です。アサジョリによると、人格形成において最も重要な手段は、英語で言う「アイデンティフィケーション」つまり一つの理想像に自分自身を合わせて行くことです。それは、子供が、まず親を見習って自らを形成し、やがて親以外の人物に目を向け、そのイメージを膨らませて行く過程にみられる現象です。これは、私たちの心には、何かすぐれた存在に対する憧れがあり、その対象と自らを合一させることによって、自らを形成しようとする「強い本性的傾向」があることを示しています。その意味で人は、常にある「モデル」と共に生きている、と言うことができます。

しかも人間の心が本来開かれたものであるとすれば、それはW・パネンベルクの言う「神開放性」へと向かうはずです。ひとは有限なモデルを越えて、超越的モデルを求めらるるのであり、ガラテヤ書の問題の聖句は、この有限なモデルを越えたキリストとの出会いを指していると考えられます。ただし、それがいわゆる同一化としての神秘主義的出会いではなく、そこになお区別の存在する神秘主義的事態、つまりその真の出会いのなかで、それまでの古い自己が死に、新たな自己が生まれる瞬間であるとすれば、そこで起こっているのは主体と客体の逆転です。今や、モデルであるはずのキリストが主体となっています。トゥルニエは、この事態を「しかしキリストをモデルとする場合、モデル自身が私たちの中に入り込み、そこに住み、そこに生き、存在的にも一体となる」と説明しています。

さらに彼は、アルバート・シュヴァイツァーのパウロ研究を引用しつつ、こう述べています。「聖パウロの書簡の中に、しばしばキリストと共に死に、キリスト共に復活するという言葉が出てきますが、シュヴァイツァーに言わせると、パウロにおいては、それは、単なる、追求すべき内的生活の目標ではなく、現実、彼が生きている意識そのものでした。つまり、パウロがキリストそのものになっていたということなのです。私たちも、同じように、自分が無くなり、キリストが私たちの中で自由にふるまって生きておられるという体験に、ぜひとも到達したいものです。もし死んでいるとすれば、これ以上、死ぬこ

とはないので、死を恐れる必要もなくなります。ですから、聖パウロも、自分は生きることも恐れないし、死ぬことも恐れない。十分、心の準備ができていると言ったのです。彼はまた、自分は地上に生きてままで、すでに天国の生活を生きはじめているとも言っています。そうして、天国の生活が、どの程度、自分の中に入っているかは、自分が、どの程度死に、キリストがどの程度自分の中に場所を占めているかによってはかられると言っているのです」(33頁以下)

フラッシュ体験がそうであるように、神秘体験は、それ自体を言語化しようとしても、それはどこまでも後からの解釈にすぎず、それ自体は言語による理解を越えたままです。したがってそれは、過去のある特定の瞬間に起こった、しかも同時にその制約を超えた内容をもつ出来事であり、この意味でカイロス体験と呼ぶこともできます。トゥルニエはこれを「心理総合理論」を用いて説明しようとしたわけですが、筆者は、あの「キリストを着る」(コロ3・9-10)という表現を手がかりに、「わたしが包まれている」状態としてイメージし、内容的には、「聖化」というよりも「義人にして同時に罪人」というあの「同時性」を含む出来事に近いのではないかと考えています。

トゥルニエは先の引用に続いてこう述べています。「私自身、年老いて、死が近づいてきました。私も、聖パウロと同じように、生きることをおろそかにしないと同時に、死ぬための心構えもできているように感じています。私は、今こうして生きている、この地上の生活がとても好きです。キリストと共に、この地上に生きることができるからです。しかし、わたしは、死後の世界で、キリストとさらに親しく、充実した生活に入ることができると思うと、心が沸き立つのです」(34頁)。

これは、79歳のトゥルニエの言葉です。「キリストとの交わり」の「深まり」に対するこの憧れは、一体どこから来るのでしょうか？あたかもそれ以外のものは目に入らないかのような表現であり、「キリスト論的集中」とでも呼ぶべき姿勢が現れています。

### トゥルニエの聖書研究

ここで少し立ち止まり、本論の流れから離れて、トゥルニエの聖書研究に対する基本姿勢を確認しておきましょう。

彼は『聖書と医学』の第一部「聖書の見解」2「平信徒としての聖書研究」においてこう述べています。

「神学者は聖書から出発して人間の方に進む。神学者は、聖書を釈義および歴史批評として研究し、仔細に吟味して、聖書の中に神の言葉を認識する。そして聖書から教義と教

理を導きだして、私たちが宗教的に教え啓蒙する。これは神学者の使命であって、私たちではない。私は、医師たちのためにはこれと反対のやり方を提案する。すなわち、私たちの実際の関心、毎日の診療において直面する問題から出発して、聖書の中に答えを求めて行く方法である。ある時、エミール・ブルンナー教授が私に次のように言われた。「聖書を読みましょう、絶えず私たちの毎日の生活を考えながら。そして絶えず聖書について考えながら、私たちの生活を生きましょう」と(15頁以下)。

これは1951年に活字になった文章です。トゥルニエの基本姿勢が明確に語られています。日本にゆかりのある神学者エミール・ブルンナーの名前も出てきます。そしてわたしたちが驚かなければならないのは、聖書にその「答え」を見いだすために、彼の費やした時間と熱量です。10年前に出版した『人格医学』の中で「医師たちは聖書の中に生命と健康の理法を探求すべきではないか」と問いかけたトゥルニエは、その後、10年の歳月をかけて聖書と取り組み、この『聖書と医学』をまとめています。その間の苦闘について彼はこう記しています。

「ところが、私は袋小路に入り込んでしまった。私は聖書全体を読んで、医学、心理学、病気および生活指導に関係のある章節をどれもこれも皆ノートに書き写すことにした。そして私が発見した最初のことは、聖書の内容の比類のない豊富さであった。聖書は人生のドラマの本である。そのドラマと終日取り組んでいる私たち医師にとって、聖書はまことに興味深く、私たちをとりこにしてしまう」(17頁)。

筆者は、長い間この発言を知らずにトゥルニエの書物に触れ、その聖書引用の多さとその的確さに驚いてきましたが、今ようやくその謎が解けたような気がしました。いずれトゥルニエに関する研究が進み、この聖句を整理した「ノート」が活字になる日がくるかもしれませんが、いや、一日も早く、誰かがそれを資料として出版しなければなりません。それはきっと聖書の「もうひとつの読み方」として、広く一般に受け入れられるはずです。

彼の聖書研究は、やがて個人の研究を越えて、1947年の「ボセーのエキュメニカル・インスティテュート」における合同研究を皮切りに、聖書と神学の議論ではなく、医学と個人的経験について語り合うと共に、聖書のもつ意味について学ぶ機会として継続されて行きました。

それにしても驚くのは、聖書に対するトゥルニエの「基本的信頼」感です。しかも彼は決して所謂「逐語靈感説論者」ではありません。当時の学問的研究成果を知りつつ、「適切に」聖句を引用しています。問題は、この「適切に」とは何を意味するのか？ということですが、現実には、医療現場の諸問題に「答える」聖句を、どのようにして客観的に選ぶことができるのか？ということです。医学の、さらに科学の限界を指摘しつつ、しかも

その成果を十分にくみ取りつつ、答えを探し出す「方法」はあるのか？ということになります。極論を言うならば、その「方法論」が「黙想」であり、その黙想の内容があのか「フラッシュ体験」を基礎にしているとすれば、この業は彼にしかできない、ということになります。これが、トゥルニエの魅力である同時に、違和感を覚える理由ではないかと考えています。ただしこの「黙想」は、すでに紹介したように、10年以上の聖書の読み取りと、共同研究を前提としていることを忘れてはなりません。またこの「黙想」は、基本的に個別的事情から始まるため、その結論をそのまま一般化する誘惑と戦わねばならないことを、トゥルニエは十二分に承知しています。

さらに今回は触れませんでした。彼が改革派の伝統、カルヴァンの神学に親しんでいたことを忘れてはなりません。例えば、彼の著書『生の冒険』の最終章21「人生の意味」において、彼はこう述べています。「人生の統一を形づくるものは神の知識である。行動の冒険の真の価値は、私たちが何をしていたかではなく、それを神と共に行き、神の創造の冒険の中に入り、神と交わりを結んだということである。この親しい知識がこの上ない冒険となるのである。「人生の目的は何ですか。—— 神を知ることです。人間の最高の幸福は何ですか。—— それも同じです」とカルヴァンは彼の教理問答の最初に書いている」(291頁)。

これがトゥルニエの聖書解釈の背後にあるもう一つの前提です。これを考慮せずに、彼が実際に引用している箇所を集めて、それを分析しても、その聖書解釈の特色を明らかにすることは難しいと思われれます。トゥルニエにとって、改革派教会の伝統を十分に味わいつつ、その改革を模索するなかで出会ったのが「黙想」の試みです。彼の教会改革に関する情熱がどれ程のものであったかは、例えば、トゥルニエ著『調和なき世界の人間——現代社会と人格の病理』(1947、浜崎史朗訳、ヨルダン社、1972)の最終章6「教会の任務」の記述から明らかになります。第二次世界大戦直後の状況において、教会と社会のあるべき姿を求めつつ、あらゆる「分離」の問題の解決は、「われわれの全存在をイエス・キリストの権威に委ねる」(21頁)ことにあるとして、トゥルニエは「イエス・キリストがわれわれの心をとらえるとき、われわれの全身をわななかせる激動」を思い起こすように促しています。それは「混乱させる情熱ではなく、人格に調和を与える情熱である」と述べています。

しかも彼はここでも終末論的な留保を忘れず、この世の文明を「神の王国」と混同しないように気をつけようと勧めつつ、聖霊の働きの重要性を強調しています。このバランス感覚は、いわゆる聖霊運動の単眼的主張とは明らかに異なります。そして「精神」と「聖霊」の関係について、冷静にこう説明しています。精神は人間に特有な本質的要素であり、



本来、人格はそれによって導かれるべきであったのですが、意志の倒錯により「覆い隠され、ねじまげられてしまいました。」この「精神」の本来の働きを新しく蘇らせるのが「聖霊」であり、この「靈感を受けた人びと——換言すれば、イエス・キリストを主と認めることによって聖霊に与る人びと——だけが、この世での精神の階級組織修復に真に参与できる」(212頁)と。そしてトゥルニエは、この書物を、「すべての学問が神から靈感を受けるようなひとつの文明への道を求めるのは、神御自身がわれわれにそうすることを促しているからであり、預言者時代のように、神の声がうず高い廢墟の上に立ち上がっているからである」(213)と結んでいます。ここには、預言者と自らを重ね合わせているトゥルニエがいます。

### トゥルニエの言葉

次に、『聖書と医学』の第一部からいくつかの言葉を引用しておきますので、それらを読みながら、トゥルニエの世界を想像してみてください。

「聖書は科学をも人間の力をも非難しない。聖書は、それらのものを、人間が創造者に従って取り扱うべき神の賜物として示している」(31頁)。

「科学の領域は量の世界である。意味は価値の領域に属する。意味は、量の前に置かれた数学的プラスまたはマイナスに似ている。それでは、物事に意味を与えるものは何であろうか。それは神との肯定的または否定的な関係である」(43)。

「聖書によれば、創造は神の愛の現れである。神は世界を愛のために創造された。愛、ただ愛のみが、世界その存在する理由である」(58)。

「全自然は、人間が彼の創造者から健康な生活法を学び取るための本である」(78)。

「自然と社会は神の道具である。……それらはしるしである」(79)。

「結婚関係の中で体を与えること、すなわち、遠慮の最後の防壁を破り崩すことは、全存在を与えることの象徴であり、究極的には、信仰において自分を神に全く捧げ尽くすことの象徴である」(97)。「信仰によって自己を完全に与え、信頼することの生きた形、およびそれらへの訓練。これが聖書の中で性本能に与えられている位置である」(98)。

「ヨセフは、私たちが今日、母親固着と呼んでいるものの犠牲者である。彼の支配欲求は、現実には、彼の母ラケルの欲求であり、彼女によって彼の潜在意識に暗示されたものである」(110)。



「すべての病気の一般的意味とは、それが、人類の墮罪以来自然と世界を支配している無秩序の症状であるということであり、それは、神の恵みによる快復においてのみ正しく直される」(123)。

すでに述べたように、トゥルニエは、改革派のカテキズムによって育てられ、カルヴァンをよく読み、そしてバルト神学の持つ意味も十分に承知しつつ、つまり超越論的神学的相対主義を知りつつ、あえて「人格医学」を説いています。したがってこれらの引用もそのことを踏まえて解釈する必要があります。その聖句引用も、彼なりの、キリスト論的集中に基づく聖書理解を前提に、臨床現場の問いに答えようとした結果であると考えられます。

### 新しい信仰生活

ここでもう一度、「キリストに満ち溢れた日々」の講演に戻しましょう。先の文章は「私は、死後の世界で、キリストとさらに親しく、充実した生活に入ることができると思うと、心が沸き立つのです」という言葉で終わっていました。そしてこの後で、若い頃の自分の信仰生活は、「キリストとの親密な生活」からほど遠く、ただ神の周りをめぐっていた、と振り返り、あのフラッシュ体験が起こった出来事に言及しています。彼はこう語り始めます

「しかし、ある日、ひとりの年老いた牧師に出会うことによって、私の信仰のつたなさをしみじみと悟ることができました。ある用件でお目にかかり、話が終って、最後に二人で静かに祈りました。しかし、そのときのこの牧師の姿を決して忘れることができません。そこには、信仰のとばりも下り、すでに、キリストを肉眼で見ているとしか思えない天国の人がいたのです。私は、家に帰って、このことを妻に話しました。あの老牧師に見たキリストとの親しい生活を、私たちがぜひ生きてみたいものだ、その恵みを祈り求めようと話し合ったのです。そうして、神は、わたしたちのその祈りを聞き入れてくださいました。それからしばらくして、私は、今までとは違った信仰生活が始まったようだと言ったことができるようになりました。私は、一日中、キリストと個人的な会話を交わすようになりました。自分の中に感じることは何でも、素直にキリストに語り、キリストの考えを、心の耳で聴くようにしています。キリストは、私の人生の伴侶となり、わたしと共にあって、日夜導いてくださっているのです」(35)。

この文章の内容は、『聖書と医学』(1951)におけるあの引用とほぼ同じですが、この講

演 (1977) では、ガラテヤ 2・20 の聖句の解説の実例として上げられており、トゥルニエにとってこの事件は、決して忘れられない決定的に重要な出来事であったことが分かります。彼の言う「黙想」の内実は、おそらく、この同伴者イエス・キリストとの親しい対話であり、それはまた、そこで生ずる自己同一化の負の側面、つまり自らの思いをキリストの言葉と取り違える危険と誘惑を避けるための戦いでもあったと推察されます。

## 「老い」と信仰

本項では、トゥルニエ著『老いの意味——美しい老年のために』(1971, 山口實訳, ヨルダン社, 1975) の第六部「信仰」を取り上げ、その内容を紹介しておきましょう。この第六部はこの書物の結論部であり、邦訳で 46 頁から成っていますが、そこに小節の区別はなく、次のような見出し語が並んでいるだけです。したがって本稿における文頭の番号は、後の議論のために筆者が便宜的に付したものです。

これらの見出し語を読むだけで、何が記されているのか、おおよそ見当が付くはずですが、ただし実際に読んでみると、筆者の最初の経験では、この本の中で最も分かりにくい部分であり、思わず、失敗作では？と言いたくなるような展開になっています。しかし何度か読んでいるうちに、取り上げている事柄の性質がそうさせているのではないかと考えるようになりました。先に紹介したガラテヤ 2・20 のような個所も、筆者には長いあいだ理解し難い箇所でしたが、今回は、自分なりに何とか言葉にすることができました。「永遠」と「時間」の接点に関する事柄はそもそも言語化することが難しく、「イメージや物語」に頼らざるをえないことを受け容れることができるかどうか、それが、さらに一步新たに踏み出すための重要な分岐点になるようです。それが可能になると、不思議なことに少しずつではあっても「分かってくる」ようです。さらにほんやりとではありますが、時間が経つと、もう一度チャレンジしてみようとする気持ちも湧いてきます。

この第六部の見出し語を全部書き出しておきますので、ゆっくり読んでみてください。自分なりのイメージが湧いてくるはずです。

第六部「信仰」, ①「老いは死の予告である」, ②「信仰者はより容易に受け入れることができるのか?」, ③「信仰で苦悩がなくなるのではない」, ④「哲学者の立場」, ⑤「キリスト者の立場」, ⑥「信仰の勝利」, ⑦「ある司祭医師の反省」, ⑧「復活(甦り)」, ⑨「彼方のことで何を知らうのか?」, ⑩「イエス・キリストの復活」, ⑪「人間的体験」。

これらの項目のなかで ① から ⑥ までは、「老い」の問題は「死」の問題に他ならず、哲学者は、これをどう受けとめているのか?そしてキリスト者は、これをどう受けとめて

いるのか？いや、どう受けとめるべきなのか？を論じていることが分かります。しかしこの「べき」は倫理的視点からではなく、今でいう「終末期医療」の視点から、哲学の限界を指摘しつつ、「永遠の今」を生きる視点から語られています。ここまでは、解説抜きで「時間をかけて、自分のペースで」読むことをお勧めします。

本稿の冒頭で述べた通り、1986年に初めて読んだときには、短時間で読むことができました。しかしあれから35年後の現在、トゥルニエが73歳で書いたこの書物を、すでにその年齢を過ぎた筆者は、別の感慨をもって読むことができました。実に味わい深い文章と事例が並んでいます。③「信仰で苦悩がなくなるのではない」のところでは、トゥルニエの4歳上の姉の臨終の場面が語られており、それまでの兄弟姉妹の関係をあれこれと想像せずにはいられませんでした。ただし残念ながら、その内容について記した他の記述にはまだ接したことがありません。この点でも、一日も早くトゥルニエに関するまとまった評伝が出版されることを願っています。本項には、姉妹の死に直面した兄弟の姿が描かれています。

なお、「4歳上の姉」という記述は、トゥルニエ著『女性であること』（1979、山口實訳、ヨルダン社、1981、10頁）の記述に基づいており、『老いの意味』（邦訳379頁）では「妹の死」となっています。後者の記述が正しいとすれば、トゥルニエには姉と妹がいたことになります。またこの『女性であること』1「私が心の触れ合いを見いだすまで」には、彼の父が1828年生まれであること、その父がトゥルニエ誕生後、3ヶ月ではなく、「2ヶ月たつたたないうち」他界したこと、トゥルニエが生後6カ月後、生死の境をさ迷い、「ロバの乳」で助かったこと、「一人自分の世界を求めて木に登って時を過ごすか、叔父の飼っていた猟犬たちを心の友として遊んでいた」こと、学校の成績も思わしくなかったこと、しかし叔父がいつも「はっきりと、私が叔父の子ではなく、父の子であること忘れさせず、父の子として立派な人間になるように常に自覚を促してくれたこと」、結婚のことで相談したときも、叔父は、「私としては何も言うことはないが、お父さんはどう言うか、よく考えてみなさい」と言ったこと、等、トゥルニエの生育環境を理解するうえで貴重な回想が沢山記されています。さらにその後の彼の、「親しい交わりの対象としての温かい神」（15）に出会うまでの華々しい諸活動も記されています。例えば、学級委員を務めたこと、演劇の夕べの企画・実演したこと、ジュネーヴ大学に学生自治会を創設したこと、学生連盟の委員長として活躍したこと、赤十字の国際委員となり、子供の救済活動を目的とした青年運動のための国際本部の設立運動に関わったこと、結核に冒された母親の子供を保護する結核療養所をジュネーヴに設立する運動などに邁進した事実が語られています。

この経歴を見るかぎり、トゥルニエをやがて内科医から精神医に転向した人物として、

単純に、どちらかと言えば物静かで温和な人物として捉えてはならないことが分かります。孤児であるがゆえに、たしかに自ら自己閉鎖的状况を作り出し、その中で孤立感情を味わい、自らの情動の発現を恐れたとしても、精神科医の役割を果たしてくれた人々との出会いを通じて、まず知的表現による自信の獲得と、その厚い壁の崩壊を経験することにより、人格的交わりに穴が開き始めると、それまで内側に潜んでいたエネルギーが奔流のようにあふれ出します。まさに彼の人生は『生の冒険』の連続となり、次々と新たな視点から「人格医学」の諸相が展開されて行きます。

## 二つの読み方

「個々の具体的事例から、一般に通ずるような法則を導き出すこと」を「帰納」と呼び、「前提から、論理的に正しい推論を重ねて結論を引き出すこと」を「演繹」と呼ぶとすれば、限られた時間のなかでの読書はどうしても演繹的にならざるをえません。先を急ぐからです。ところがゆとりのあるなかでの読書は、かなり違った雰囲気になります。ある個所でしばらく立ち止まることができるからです。筆者が「実例が多くて、読みにくい」と感じたとき、そこには無意識のうちに演繹的思考が働いていたと考えられます。そもそも「医学」は帰納的思考を前提としており、その結果を基に著作が進められているとすれば、そこに紹介される例は、単なる事例ではなく、時間をかけて確かめられた意味のある事例ということになります。したがって先を急がずに、むしろ観察的な姿勢が求められることになります。そうすることにより、読者と事例の間に適度な距離感と、それと同時にそれに共感する可能性が生まれます。具体的には、読者が事例に自らの経験を重ね合わせる余裕が生まれます。それも直感的に行われるだけでなく、ゆとりをもって味わう感覚、つまり適度の距離感をもって味わうことが可能になります。

この「ゆとりのある感覚」をもってトゥルニエのこの第六部「信仰」を読むと、筆者のあの「失敗作ではないのか？」との第一印象は「はやとちり」であったことが分かります。そもそもこのような落ち着いた気持ちで読むべき箇所であったのです。著者自身が、事柄の神秘性のゆえには、表現の難しさを知りつつ、筆を進めています。わたしたち読者をかろうじてまったくの混乱から救ってくれるのは、「見出し語」です。ただしこれも、正解と決めつけてはなりません。一つの可能性として読むべきでしょう。

## 信仰の勝利？

⑥「信仰の勝利」の項目に、クエスチョンマークをつけたのは筆者です。この疑問符は「信仰」そのものに対する疑問符ではなく、そこに至る過程の難しさと、それが含む「矛盾」を意識していることにこそ、トゥルニエの思想の魅力があると考えたからです。宗教改革の発見した「義人にして同時に罪人」という同時性の主張に似た雰囲気を感じずるからです。これまでの引用から推察されるとおり、トゥルニエの生き方の転換点はある「フラッシュ体験」にあり、そこで大きく方向転換をするわけですが、新約聖書の発見が旧約聖書を排除しなかったように、トゥルニエも「フラッシュ体験」において古い生き方を、いわば弁証法的に新しい生き方に昇華させています。これが筆者の率直な印象です。

この項目には、次のような言葉が出てきます。

「私は若い時からそのことを強く感じていました。といて、そのために世間から顔をそむけたり、世に出る努力を棄てたわけではありません。それどころかむしろ情熱的に関わって行ったと言えましょう。ただ、それでもこの世界は、神が私の人間形成のためにお遣わしになった仮のものだという気持ちは去りませんでした。私の祖国はあくまでも天にあったのです。そして、年をとるにつれて、ますますこの地上の生活は、私には神を知り、神を愛するための見習いの時と思えてきたのです。キリスト教に特有で、ハイデッガーには欠けているもの、それは愛と信仰と希望です。もちろん、これはハイデッガーへの非難ではありません。なぜならこれは、哲学の問題ではなく、むしろわれわれがこの世でなしうる具体的経験のひとつ、すなわち、他人や神との交感という経験の問題なのですから。」(387)。

ここには、天への憧れがありのままに表現されています。孤児として育ったトゥルニエにとって、天の国は、両親のいる空間でもあったはず。「神を知り、神を愛する」ことは「両親」と親しく語らうことでもあったのではないのでしょうか？

トゥルニエは、さらにこう言います。「このように、死に対するキリスト教の答えは哲学的ではなく、知的な観点からするといささか曖昧さをとどめているように思われます。もし誰かに「信仰していれば、死は受け入れることができるのですか」と質問されれば、正直言って私は「はい」とも「いいえ」とも、どちらでも答えざるを得ないのです。何という矛盾でしょう。多くの読者の方を失望させるのではないかと心配です。信仰者としての確信に満ちた返事を期待していた向きには、特にそうです。しかしこの矛盾は人間の本性そのものにひそむ矛盾ではないのでしょうか」(同)。

単純な「あれか、これか」という発想ではなく、「あれも、これも」と言いつつ、「悩み

のなかで」答えを探して行く、いや「聴いて行く」、ここにトゥルニエの魅力があり、この生き方を可能にしているのがあの「フラッシュ体験」ではないかと思います。そこには「生けるイエス・キリスト」が、「復活者イエス・キリスト」が、「同伴者として」「友として」共にいるのです。そのことを示唆するこの文章をどのように読むか、それは人によって、また同じ人でも時によって異なることでしょう。しかしいずれにせよ、わたしたちはここで、この矛盾にみちた人間存在を、そのまま信仰の在り方として語るトゥルニエに出会っています。

### ある司祭医師の反省

⑦「ある司祭医師の反省」において紹介されているのは、⑥「信仰の勝利」の最後に紹介した問いに対する直接的な答えではなく、「名もないキリスト教徒たち」が、激しい殉教のさなかではなく、静かに、しかも確信をもって上げる叫びです。それは、「その人が、イエス・キリストと一体となって味わった個人的な体験を本当に生き切っている」と感じさせる言葉です。それは「永遠の今」を生きているひとの言葉です。キリスト者にとって「永遠の今」とは、トゥルニエの言う「同伴者イエス、共なるイエスとの人格的交わり」に他なりません。永遠の中に足を踏み入れている人のみが、初めて自らの有限性を受け入れることができるのであり、この決定的な歩みは、老人になって死が近づく前にも十分にはたすことができます。しかしわたしたちをそこへ導くのは、しばしば、親しい人・存在の死、喪の体験であることは確かです。

肉親、親族、恩師、先輩、友人、同僚、といった親しい存在の死に接する年齢になり、トゥルニエの悲しみと霊的な交わりへの憧れがようやく分かってきました。恥ずかしい話ですが、まことに遅き目覚めです。筆者もようやく知的理解から「深み」へと超脱しつつあるといいのですが。はたして？トゥルニエの場合であれば、それは、広い意味でのカテキズム教育を背景とした「フラッシュ体験」によって可能になったと考えられます。

⑧「ある司祭医師の反省」の司祭医師とは、外科医マルク・オレゾン氏のことです。トゥルニエによると彼は、「外科医として人間の肉体を、精神分析学者として人間の魂を、そして司祭としては宗教的な人間の姿を十分に知っている」人物です。さらに彼には「作家としての生涯」も付け加えなければなりません。「彼が何よりも主張したいのは、死は必然的なものであること、つまりそれを自然現象として考えよ、ということです。」そして彼の主張のなかでトゥルニエの関心を強く引いたのは、誕生も死も「自然的であると共に神秘的現象である」として、誕生と死の二つを合わせて捉える大きな視点です。人間は「誕



生と死において、単なる存在を越えたひとつの神秘的な現実体」(397)なのです。死を受け入れるということは、この現実体を、つまり「超越」に包まれていることを体感することに他なりません。

## 復活

したがって次に問題になるのは⑨「復活」です。ダニエル・枢機卿の表現を借りると、「新しい人生がわれわれを待っている」のであり、その新しい人生との部分的接触は、この世でも、他人との真の交流の中で、そして神との交感の中ですでに経験されています。この新しい人間のイメージ、あるいは原像は、あらゆる人間の魂の奥深くにある集団的無意識の中に刻み込まれています。医療の現場では、それは患者の夢の中に現われてきます。「このようなわれわれの魂の中に刻み込まれた原像が象徴するのは、完全であり、歓喜であり、共同性であり、調和であり、混じりけのない熱情であり、平和」(400)です。それは、自分が「天上の音楽」を歌うコーラスの一員となっている夢となって現れることがあります。

この「天上の音楽」の話を読んだとき、筆者はひとつの手がかりを発見したような気がしました。それまでトゥルニエの著作のなかで、音楽に言及した箇所を知らなかったからです。彼は「ネリーとの50年にわたる結婚生活とその後の10年間のやもめの生活の後に」(『人生を変えるもの』175)、つまり1984年に、86歳で、コリンヌ・オラマと再婚しています。二人は、トゥルニエの思想を彼女がピアノの即興演奏で表現するというプログラムのなかで知り合ったようですが、筆者にはその本当の理由がよく分かりませんでした。彼の言葉によると、聖霊によって導かれた「創造性」を大切に彼女の生き方に魅かれたようです。きっとそうなのでしょう。しかしそれでも筆者にはまだ謎であった部分が、復活と「天上の音楽」を結びつけているこの箇所にふれたとき、彼らの間には共に「天上の音楽」のイメージがあったのではないかと想像したのです。その天には、亡き母も、父も、そして前妻もいるのです。

このような新しい生への憧れは、人間の心から消すことのできない強い願望です。しかしわたしたちの感覚や理性はその完全な姿を捉えることはできません。だからこそ、「オレゾン師はわれわれに復活を固く信ずるように要求しながら、懸命にも天国や地獄の絵図は何一つ示そうとしなかった」のです。

トゥルニエはこの⑨において「結局のところ、『復活』する生とはいかなるものか、誰も知りえません。このことは十分認めておくべきでしょう」(402)と述べ、パウロが第一コリント15・35-44の中で語る「霊の体」も、復活とは人格の復活であり、そこでも個人



としてのたしかな存在であることを知ることで満足するように勧めています。

したがって⑩「イエス・キリストの復活」も「われわれの人間本性によって条件づけられた認識の限界を超えた」出来事であり、「精神の閃き——啓示」によってのみ開示される出来事です。そしてこの啓示との出会いについて、トゥルニエはこう語っています(⑪)。

「このように経験と教説との間には対立はなく、たしかに一致があります。しかしながら、その間に順序があるのもたしかです。経験の優位ではなく、経験の先行ということです。私はまずイエス・キリストとの出会いを体験します。それから、私は『聖書』を開きます。そして、私の体験はまさしく啓示だったと知るので。私は確かに復活を信じています。しかし、死が近づくにつれて、私のこんな素晴らしい安堵感は、その教説よりは、私をイエス・キリストという人格に結びつけている深い絆に基づいていることを感じます。私はひとりぼっちで死に面しているのではない。自らもまた死に直面し給うたイエスと共にあるのだと感じるので」(408)

「このイエスとの人間的な絆こそ、私を、私と同じような不安に悩む人々に結びつけ、また、人生の中に生ずる諸問題を未解決のまま受け入れることを私に許してくれるものに他なりません。ヨブは彼の心を転倒させる不当な悪の問題に対する答えは得られませんでした。しかし、彼は神との人間的な出会いの体験は得ることができたのです(ヨブ42・5)。私も、この本の中で誰かの質問に答えようなどは夢にも思っていません。丁度人生におけると同様に、答えようとするよりはもっと耳を澄ますつもりです。答えは神から訪れてくるものなのです」(410)。

### 残された課題

P・トゥルニエの書物には、人を惹きつける魅力と同時に、人をはねつける力が働いています。このアンビバレントな状態を抜け出そうとして、何度か「体系化」を試みてきましたが、その都度見事に跳ね返されてきました。「医学」と「医療」を明確に区別し、「神学」と「素直な聖書理解」を区別し、しかもそれらを二元論的ではなく、あたかも三位一体論の論理を用いるかの如く、それらを「区別すれども、分離せず」の発想で議論する彼の著作を体系的に理解しようすることは、そもそも対象の独自の性格を無視した無謀なアプローチだったのでしょう。

そこで体系化をあきらめ、「春の野原に咲き乱れる野草の中から、人為的ではなく、あるがままにつくり上げた大きな花束」として鑑賞し、その文の一行一行に含まれている洞察を味わうように勧めるひともいます。言わば「詩」のように読め、ということなので

しょうか？

それまたしかに一つの方法かもしれません。しかし筆者は、著者の宗教体験にこだわって読むという方法もあるのではないかと考え、その核心となる「フラッシュ体験」に的を絞って、それに言及している箇所を時系列に従って整理しようと考えました。しかしその結果を並べるだけでは、年表づくりに終わってしまい、いわゆるカイロス体験の味はまったく伝わりません。そこで、たとえ読みにくくても、それらを、文脈を意識しながら、初めと終わりを意識しつつ拾ってみる方法を選択しました。しかもできるだけ、トゥルニエ自身に語らせたいと思いました。そしてその結果できあがったのが、本稿です。

ところが、どうしても「これで終わり」と言い切れないものが残ってしまいます。それは、この「フラッシュ体験」から、そしてそれが先取りした「復活の神学」から、改めて彼の論じた諸テーマを読み直すことです。具体的には、ライフ・サイクルの中で生ずるすべてのこと、つまり「誕生と死」、「父なるものと母なるもの」、「力と老い」、「苦しみ」、そして「科学と魔術」といった問題に関するトゥルニエの言葉を拾ってみたいと考えています。

それは、神学的には、終末論的キリスト論を前提としながらも、改めて創造論を考えるという作業になるはずですが、それにしても20世紀後半に盛んに論じられた聖霊論および霊性の神学を、トゥルニエはどのように捉えていたのでしょうか？「黙想」とは、言うまでもなく、聖霊の働きを前提とした沈黙の行為であり、彼の著作はその聖霊の働きの実であるとすれば、わざわざ聖霊論を論ずる必要はなかったのかもしれません。

21世紀は、東日本大震災や気候変動による災害において明らかになったように、改めて「人類の責任」が問われる世紀であり、「専制主義と民主主義の対立」も一触即発の状況にあります。このような時だからこそ、「聖書の豊かさに揺り動かされた」P・トゥルニエの生き方と思想のもつ可能性を、しっかりと見極めたいと考えています。

(2021.4.20 記)